■いわて文化ノート

「えみし」社会の誕生と後世のアイヌへと連なる同族意識

女　鹿　潤　哉（主任専門学芸員）

1　「えみし」社会の成立（はじめに）

2世紀（弥生時代後期）後半頃、北海道では、道央を中心とした後北式土器に伴う文化（以下、後北文化と書きます）が劇的に道内に広がります。そして、4世紀（古墳時代前期）前半を中心とする時期には、北海道後北文化にみられる諸要素が、北東北三県を主体として、宮城県北部などの東北地方北半域にも広く出現します。後北式土器はまた、北の樺太（サハリン）南部や千島列島南部などにもみとめられます。

後北C2・D式土器（軽米町大日向Ⅱ遺跡出土・岩手県所有）

その後も、北東北三県を中心とする地域と北海道南西部とは、古代を通じて相通じ合う生活・文化、価値観を共有するなど、密接な関係を維持しています。それこそが、古代の倭国や日本国からエミシ、エビスなどと呼ばれ、歴史書に「蝦夷」などと記された人々の絆であったと考えます。

また、エミシやエビスなどの呼称、「蝦夷」などの漢字表記は、古代の倭国・日本国側によるもので、エミシやエビスなどと呼ばれ、「蝦夷」と記された在地の人々に由来するものではなかったのです。こうしたことから、私は、これら在地の人々を「えみし」と表記することにしています。ですから、「えみし」としての絆は、後北文化が東北地方北半に広く出現する時期にさかのぼると考えられ、「えみし」社会は4世紀前半に、東北北半から北海道南西部にわたって成立したと理解されます。

2　「えみし」のことばとアイヌ語

東北北半には、アイヌ語によって解釈できる地名（以下、「アイヌ語地名」と書きます）が多くみられます。例えば、盛岡市米内などはアイヌ語で「沢」「川」を意味するナイに、岩手県北部に発し、青森県八戸市で太平洋に注ぐ馬淵川などは「川」を意味するベツに由来するとされます。また、住田町世田米などは「～の（たくさん）ある・所」を意味するオマ・イに、釜石市嬉石は「～のある（いつも～する）・所」を意味するウス・イに由来すると考えられます。

岩手県内や青森県北部にみられる田子は、平地にある小山を意味するタプコプに由来するとされ、岩手県内の田高・達谷・立根も、その音を漢字で写したものと考えます。また、久慈市戸鎖、宮古市田鎖は、川の蛇行によってできた耳の形をした沼を意味するト・キサルに由来すると考えます。実は、東北地方北半の「アイヌ語地名」は、古代の日本国が編さんした歴史書にも、「えみし」に関連する記録として登場します。従って、古代の「アイヌ語地名」は、「えみし」社会に由来すると考えられます。

また、古代の記録によれば、「えみし」が用いたことばは、日本国で話されたことばとは全く異なり、両者の会話には通訳が必要だったことも記されています。ただ、北海道を中心とするアイヌ文化の成立は14世紀頃（鎌倉時代末～南北朝時代）とされますから、古代には、アイヌはまだ存在せず、そのことばとしてのアイヌ語もまた存在していなかったことになります。

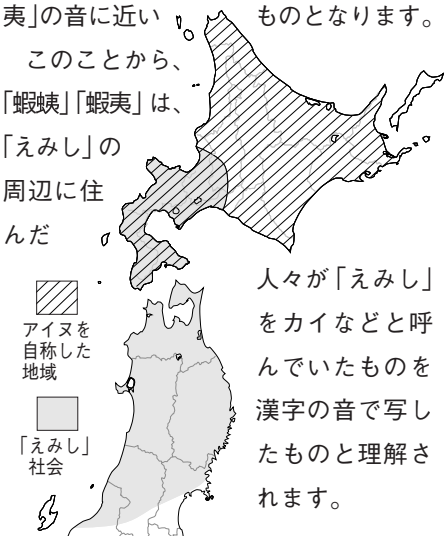
こうしたことから、古代の「えみし」は、今日のアイヌ語に極めて近いことばを用いていたといえます。しかし、同時に古代の「えみし」をアイヌそのものとみなすことはできないことにも気づきます。

3　「蝦夷」「蝦蛦」の意味

古代日本国や中国唐の記録は、「えみし」を「蝦夷」「蝦蛦」などに表記していますが、これら二つの用字の現代国語の漢字の音はカイとなります。一般に、日本の漢字の音は、中国古代の音を比較的忠実に今に伝えるとされます。古代の「蝦夷」は、一般にエミシ・エビスなどと読まれますが、『釈日本紀』には、平安時代前期の読みを伝えると考えられる「カイ」とフリガナされたものがあり、平安時代の辞書である『伊呂波字類抄』にも、「東エビス」とともに「カイ」とする注記がみられます。

一方、中国の元・明・清時代の記録は、樺太などのアイヌを「骨嵬」「苦兀」「苦夷」「庫葉」「庫頁」などと記しており、それらは、クイ・カイに近い音となります。樺太や黒竜江（アムール川）流域の先住民は、アイヌを歴史的に「クイ」「クギ」などと呼んでおり、中国の記録は、「クイ」「クギ」などの音を漢字で写したものと考えられます。また、それらは、古代の日本国や中国唐が、「えみし」を表記した「蝦蛦」「蝦夷」の音に近いものとなります。

このことから、「蝦蛦」「蝦夷」は、「えみし」の周辺に住んだ人々が「えみし」をカイなどと呼んでいたものを漢字の音で写したものと理解されます。



7世紀後半の「えみし」社会と自称「アイヌ」の展開

アイヌに対する他集団の呼称

集　団　名	北海道アイヌ	樺太アイヌ	千島アイヌ
スラブ人（ロシア）	エソ	エソ	クリル
和人（日本）			
〈近　世〉	エゾ（蝦夷） アイノ	オクエゾ（奥蝦夷） キタエゾ（北蝦夷）	クルミシ？
〈近・現代〉	アイヌ		
漢人（中国）			
〈中・近世〉		クイなど	
〈近　代〉		クエなど	
ギリヤーク			
樺太		クギ	
黒竜江下流域		クウィ	
満州・ツングース（ロシア沿海地方・黒竜江流域）		コィエ、クィエ	
カムチャダール（カムチャツカ半島）			クシ

アイヌが隣人たちによっておおむねクイなどに近い音で呼ばれていたことがわかる
［Schrenck（1881～1895）によって筆者がカタカナ表記した］

4　「えみし」とアイヌ（むすび）

アイヌの男子は、「人間」を意味する「アイヌ」を自称したことはよく知られています。歴史上のアイヌ男子の名コシャマインやシャクシャインは、語尾に「アイヌ」という音をもつ例です。また、「アイヌ」の音をもたなくとも、改まった場では、安之助アイヌなどというように、名の後に「アイヌ」を付けて呼んだといいます。すると、「アイヌ」は、アイヌ民族の同族意識に深く関わることばだったことになります。

そして、アイヌが「アイヌ」と発音すると、アイヌ語の特徴から、カイ（ン）などに聞き取られる可能性があるともされます。これに従えば、「カイ」などの音は、「アイヌ」を自称する人々に由来することになります。すると、「えみし」の一部には、後世のアイヌへと連なる人々（アイヌの祖先集団）が含まれていたことになります。

ところが、歴史書に残る「えみし」男子の名は、ほとんどが東北地方北半に住んだ人々のもので、「アイヌ」の音をもつものは全くみられません。従って、東北地方北半の「えみし」は「アイヌ」を自称しておらず、「アイヌ」を自称したのは、北海道南西部の「えみし」だったと考えられます。

北海道後北文化は、北大式（ほくだいしき）土器に伴う文化、さらには擦文（さつもん）土器に伴う文化を経て、歴史的にアイヌ文化へと連なると考えられます。すると、後北文化には、アイヌ文化へと連なる性格が秘められていたことになります。このことから、「アイヌ」を自称するなどのアイヌ民族の同族意識もまた、後北文化に起源をもつと考えます。

古来、「えみし」について、アイヌとみなす説とアイヌではないとする説とが対立してきました。しかし、以上のことをふまえると、「えみし」は、アイヌの祖先集団を含むものであったことは明らかです。また、後北文化は、「えみし」社会を誕生へと導く一方で、後世のアイヌ民族へと連なる同族意識をも芽生えさせたと考えます。

〈このノートは、主として女鹿(2004)を要約して作成しました〉

＜参考文献＞

Schrenck, Leopold von. 1881～1895 Die Völker des Amur-Landes, Kaiserliche Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg
［H.R.A.F. によった］

女鹿潤哉2004年「『えみし』社会の成立とアイヌ民族へと連なるエトノスとの関連についての予察」『弘前大学國史研究』第116号

平澤屏山（ひらさわびょうざん）筆　「アイヌ風俗図」（館所有）